

東日本大震災と中国

● 放 眼 日 中



今回の東日本大震災から2週間が過ぎたところに上海を訪問した。「在日中国人が大挙して帰国している」

との話を聞いていたので、身構えて成田空港に行くと、機内の乗客は全体の半分に満たなかった。航空会社によると、帰国ラッシュは大震災後10日間ほどで終わったという。中国人の素早い危機管理に驚いたわけだが、よく聞いてみると少し事情が違う。

実際、上海到着後に会った中国人留学生たちは異口同音に「自分は帰国するつもりはなかった。母親から懇願されて帰ってきた」というのである。自分の子どもが異国での大きな災害に巻き込まれるのを見ていることはとても耐えられない、まして一人っ子ならばなおさら、ということだろう。

中国では、混乱の際には「自らの身は自らが守る」のが原則である。

政府や他人が助けしてくれることを想定していない。

津波の発生時に中国人研修生を先に助けて自らは波にのまれた日本人の話は、日本人であるわれわれも誇りに思うが、多くの中国人を感動させているのは、このような考えから出ていると思われる。

「日本では一体どんな教育をしているのか」。何人も中国人から聞かれた質問である。確かに、常に地震に対する訓練などは行っている。しかし、とっさに人を助ける、相互に助け合うという行動を取るものではないのか。中国人は一般的に「教育すれば改善される」と考える傾向があり、日本人の説明には納得してくれない。

上海到着後、初対面の人々から「震災は不幸だったが、日本は必ず復興するよ」などと勇気づけられた。同

時に、何人も中国人から「原子力発電所は大丈夫か、刺し身は食べていないよな」などという質問も飛んできた。そして、震災当初の様子を細かく聞きたがっていた。とにかく

「まずは情報を得る」。これが中国で生きる鉄則である、と改めて強く感じた。

しかし、この鉄則が行き過ぎると混乱が生じる。大震災直後の中国での塩の買い占めなどについて、筆者が質問すると皆が苦笑する。昨年同国で起きたニンニクや緑豆の投機と同様の現象かと思ったが、各家庭で必死に買っていたらしい。その塩はまさに「塩漬け」となっている。何故、他国の災害で中国人がそこまでパニックになるのか、正直不思議でならない。

中国では一般的に政府の発表や報道をまともに信じる人は多くない。政府が「自国の原発は安全である」

と言えは言うほど、不安になる。今回の大震災は日本に多大な影響をもたらしたが、中国に対しても、自国のエネルギー政策を問う機会になっている。

一般の人々も今回の事故をきっかけに、自国の原発に関心を持ち始めた。今後大量の電力を原発で賄う予定の中国政府としては難しい対応を迫られており、また原発をやめれば、石油や石炭などの世界市場への影響も懸念される。

そして、塩の買い占めに見られたように、一瞬のうちに情報が伝播し、多数の人間が同じ行動を取ることができることも再認識された。もしこれが原発関連の情報だったらどうだろうか。「政府の対応如何では、民衆の胸の内に潜む底知れぬ不信・不安に火を付けないとも限らない」。上海の友人がぼつりと呟いた一言が印象に残った。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。